

日本海に遊ぶ

京都大学水産実験所職員
上野 正博

3月半ば、遅い大雪がやつと明けた日に、実験所の緑洋丸は久しぶりに神崎の沖で稚魚の採集。上がってきた底曳き網からたらいに明けられた獲物をのぞき込むと、釣り餌(えさ)などに使われるアミがいっぱい。「3月にこんなたくさんいたのは初めてですよ」もう、5年以上アミの研究をしている院生のIくんも興奮気味です。

水深10mの海底の水温は10度台。丹後の海は今が一番冷たい季節なのです。アミは普通

台風の贈り物？

寒い季節には深場で過ごし、水温が上がって来るにつれて浅場が集まってきます。これから初夏にかけて浅場に

の稚魚にとっては何よりのご馳走(ちそう)。「タイやヒラメの子どもって、アミが浅場によってくる時期を知ってるのとちゃうか」って冗談がでるくらいにきつちりと時期が合っています。

1回きりの調査で判た。23号の洪水直後にやった調査では、網が上がらなくなるほど大量の木屑が入ったこと。1カ月後に行った調査では、そんなに大きな木屑は少なくなっていたのですが、海底の泥には細かくなつた植物繊維がいっぱい。でも、そのときに行つた海の生物の食べ物解析では、そういう植物繊維はほとんど食べられていなかったのも。実は植物繊維を分解できる生物はそう多くはありません。植物繊維分解の主役は微生物。半年がたち、微生物が一所懸命に分解した植物繊維がアミやプランクトンの豊富な餌になつてきているのかもしれない。



台風23号のあと、伊佐津川河口で網に入ったススキの根に大苦戦

実験所の調査シーズンはこれから本番。幸い、この春には、陸から海に運ばれる物質を海の生きものがどう利用しているかを卒業研究にした学生が、2人も大学院に進学してきます。このチャンス逃してはと、今、研究計画の相談と準備に大わらわ。